

「10万年プロジェクト」

保養活動を始めた当初、小学1年生だった男児が「北海道に行ったら、砂にさわってもいいの？葉っぱにさわってもいいの？」と無邪気に、でも嬉しさの中にも不安を隠せない表情で、お母さんに尋ねたそうです。札幌に着いた彼は、すぐに外で遊びたいと目を輝かせて保養先の近くの小さい公園を駆け回ったとか。そのシーンを今でも思い浮かべるたびに私たち「10万年プロジェクト」メンバーは、そっと目頭を押さえ、涙をぬぐうのです。その言葉に応えたい！もっともっと多くの彼らの目を輝かせたいと「一人でも多く、一日でも長く」を合言葉に福島と栃木の子どもとその家族を北海道に招く保養活動を続けてきました。

2011年3月11日の東日本大震災時、東京電力福島第一原子力発電所の爆発を発端に、大量の放射性物質が福島県はじめ周辺自治体に放出されました。原発に反対の立場の生活クラブ組合員有志は、特に悪影響を与える子どもへの放射能の毒を少しでも減らす手助けをしたいと、2011年から手探りで、放射能汚染された地域のお子さんたちとそこご家族を北海道に招く保養活動に取り組み始めました。

それは、人がつくり出した放射能の毒が地上から消えるまで10万年は続けなければならない活動であり、数えきれない世代をかけて延々と担っていかなければならない活動です。その決意を込めてこの保養活動を、現実の時間を超越した「10万年プロジェクト」と名付けました。

そして、組合員の協力のもとより、組合員外からの協力もいただきながら、2024年末現在で延べ193家族674人を招くことができました。

これは、誰もが思いがけない事故や災害に遭うかもしれず、だから放射能事故の犠牲を我が事と捉え、お互いに助け合うという考えに基づく活動です。

未曾有の事故に接し国民も政府も「原発依存度を可能な限り削減する」と誓ったはずなのに、放射性物質が飛散し豊かな海や大地を汚したというのに、放射能で汚染された帰還困難区域の故郷へ戻れない人々がいるというのに、そしてまた、事故の後始末の終わりも見えないというのに、我が政府は今「脱炭素」という国際スローガンを利用するごとく原発回帰を「エネルギー基本計画」の柱にしようと目論んでいます。

事故当時の原発周辺の人たちの惨状を見て、国民は脱原発への志向を強めたはずで、生活のためエネルギーは必要不可欠でも、そのエネルギーを産むシステムが、自分以外の誰かの犠牲によるものであってはならない。「脱炭素」目的には再生可能エネルギーの更なる開発をという声とセットで原発再稼働反対の世論を今一度呼び戻さなければ、という思いを一層強くしながら今後も「10万年プロジェクト活動」を続けます。

(2025年1月)